



Title	中国先史集落の研究－考古地理学の角度から
Author(s)	王, 妙発
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58542
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【26】

氏 名	王 妙 発
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学 位 記 番 号	第 24110 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 22 年 4 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	中国先史集落の研究—考古地理学の角度から
論 文 審 査 委 員 (主査)	教授 福永 伸哉
	(副査)
	教授 小林 茂 教授 荒川 正晴 准教授 高橋 照彦

論文内容の要旨

本論文は、膨大な発掘資料を収集整理し、考古学と地理学の方法論を融合させながら、中国先史集落の通時的展開を明らかにするとともに、文明化の過程で出現した「初期都市」の実態と意義を追求した労作である。全体は12章からなる本文と図表100点から構成されており、本文の分量は400字詰原稿用紙換算約1130枚である。

第1章では、中国先史集落及び初期都市にかんする中国内外の研究の歴史と現状を整理した上で、本論文で採用する考古地理学の研究理論及び研究方法を明示した。

第2章～第7章では、黄河中下流地域、青海高原地域、内モンゴル高原地域、東北地域にわたって発掘資料を整理し、集落の立地、規模、構造、人口、居住期間などに注目しながら、新石器時代から一部青銅器時代にかけての集落展開を分析した。

黄河中下流地域では、紀元前7000年頃の前仰韶期に山麓部に現れた定住集落が、つづく仰韶期には分布域を大きく広げ、紀元前3000年以降の竜山期になると、黄河の満水期に水没しない台地を選びながら平原地帯に広く分布するようになった。集落規模の点では、小型集落が大多数であった前仰韶期に対して、仰韶期には個々の規模が大きくなるとともに数百万m²に達する巨大集落が現れ、竜山期になると再び小型集落が大幅に増えるという推移を明らかにし、仰韶期の農業発展による人口増加や、竜山期の分業の進展による作業集団の小規模化という要因でこの変化を説明する。

青海高原、内モンゴル高原、東北地域については、詳細な情報がなお限られているという制約の中で精力的にデータを分析し、多数の小規模集落とごく少数の大規模集落が併存していること、青銅器時代には集落数自体が急増すること、農耕への依存度が増す東北地域では河川流域の平原地帯での集落形成が進むことなどを明らかにした。

第8章～第11章では、先史集落の展開の中から現れる大集落の都市的性格について、黄河流域、長江流域、北方地域（内モンゴル高原、青海高原、遼寧省西部）にわたって検討を加えた。集落の規模、構造、機能などに着目した分析によって、黄河流域では仰韶期末期の鄭州西山、竜山期の平糧台ほか4ヶ所、二里頭期の二里頭、商代の殷墟ほか5ヶ所、長江流域では良渚期の良渚、商代の盤龍城などの諸遺跡を地理学的意味での初期都市として認定する。北方地域の城壁集落については、純然たる都市ではなく、北方の遊牧民族に対する防御機能を肥大化させた「準都市集落」ととらえるべきであると指摘した。

以上の考察を総合して第12章では、中国大陆における先史集落の実態と初期都市への展開を総括的に論じる。「非季節的な定住人口が圧倒的多数を占め、二種類以上の非季節的機能を持ち、かつその一つが中心地機能であるような集落」を都市とし、そこに至る過程に「一つないし二つの非季節的機能を持つが中心地機能を持たない非農村集落」である「準都市集落」を設定することによって、新石器時代の農村集落から初期都市の出現までの展

開を合理的に説明した。そして、これら初期都市がその後数千年にわたって中国歴代の王都づくりに多大な影響を与えることになったと総括した。

論文審査の結果の要旨

広大な中国において先史集落がどのように展開し、ついには都市を形成するに至ったかという問題は、それが四大文明の一つを生んだ地域であるだけに、人類史的に見てもきわめて重要な研究テーマである。しかし、それが容易でない大きな理由は、遺跡数やその調査情報があまりに膨大であるため、全容をつかむことがきわめて難しいことにあった。この困難な作業に真正面から取り組み、6000ヶ所を超える遺跡の情報を整理分析し、中国先史集落の全体像を的確に把握したことに、まず本論文の大きな学術的意義がある。

集落の展開を理解する上で、地形環境、季節性、集落間関係、中心地機能などを重視する考古地理学のアプローチを採用したこと、考古学情報に粗密のある広大なエリアを対象とする上で、効果を發揮している。このような作業によって、黄河中下流地域の集落数、規模、立地の基本的推移を整理し、農業の発展、集落の機能、分業の進展による集団規模の変化などと関連づけて説明した点は、十分な説得力を有するものと評価できる。

また、集落の非季節的定住人口、非季節的機能、中心地機能という指標によって「農村」「準都市集落」「初期都市」を峻別し、中国における都市出現期の様相をオリジナリティ豊かに提示したことも、本論文の優れた成果といえる。

ただ、本論文にも問題がないわけではない。たとえば、集落人口を推計する際に生業の違いが考慮されていないこと、集落間の階層性についての分析が不足していること、北方の「準都市集落」の出現背景とした農耕民と遊牧民の緊張関係を示す根拠があいまいなことなどは、改善が望まれる部分であろう。また、いささか望蜀の類ではあるが、長江流域の先史集落の検討が不十分であったことも総括的論文としては惜しまれるところである。

とはいっても、明確な研究戦略のもと、これほどのスケールと精密さをもって中国先史集落の実態を解明し、都市出現への展望を示すことに成功した本論文は、まさに学史的成果と呼ぶべき価値を有しており、東アジアの関連研究に対しても大きく寄与することが期待できる。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。